2011年
5月3日
火曜日

「ユーロ危機」：ギリシャ、アイルランド、そしてポルトガル

春井久志　教授（国際金融論）

２００７年の米国発「サブプライム問題」の世界的な金融・経済危機への急展開は大方の予想を遥かに上回る未曾有の事態であった。特に、１９９９年に導入された欧州連合の単一通貨「ユーロ」を大きく動揺させた。ユーロ圏を構成する各国はその通貨主権を放棄し、各国の国民通貨を廃止した。同時に、各国の金融政策は欧州中央銀行（ＥＣＢ）の金融政策に統一され、政治から独立して物価安定を達成することを目的とする。他方、財政主権や金融規制・監督権限は各国が留保した。この「構造問題」を未然に防止するため、各国の財政規律を求める「安定成長協定（ＳＧＰ）」が制定され、ＥＣＢによる加盟国への財政支援は禁止された。今次の金融危機は「構造問題」を抱えるユーロ圏を直撃し、財政規律は破綻した。このような経済環境の変化の下で、「グローバル・インバランス」の拡大→資産価格（地価、株価）のバブル発生→世界金融・経済危機が発生した。危機に見舞われた欧米諸国の金融機関のバランスシートが大きく毀損したため、金融システムを破綻から救済するために金融当局により公的資金が大量に注入された結果、中央銀行のバランスシートの膨張と政府債務の拡大が生じた。政府債務の累増を懸念した２００９年秋以降のギリシャ危機により、民間金融機関のリスクを肩代わりしたＥＵ諸国のソブリン・リスク、そして「ユーロ危機」へと進展した。これに対応して、ユーロ圏では欧州委員会とＥＣＢ、国際通貨基金とが協力して金融安定化のための基金を緊急に設定した。

『ルカ』15章の「放蕩息子のたとえ話」では、資産家の二人の息子の内、弟が父親の財産の生前分与を要求し、財産をお金に代えて旅に出てしまう。だが放縦な生活で財産を使い果たし、困窮のどん底に陥った。そこで弟は本心に立ち返って、父の赦しを求めて、帰宅する。父親は遠くから息子を認めて、その無事の帰還を祝って大宴会を開いた。この騒ぎを聞きつけた律儀な兄は、放蕩の限りを尽くして帰宅した弟を赦すことができなかった。これに対して父は、死んだと思っていた弟が無事に帰ってきたのだから、家族として喜び祝うのは当然のことである、と兄を諭した。父親の決断を貴方ならどのように評価しますか？夏休みの宿題を休みが終わる直前になって大慌てで対処した記憶のある人は必ずしも少なくはないのでは…。その中には兄弟や、また時には両親が子供の宿題の手助けや肩代わりさえしたであろう。家族愛ならではの結束！さて、ユーロ圏諸国は欧州の統合を目指す家族愛という「結束力」を発揮できるのか？

第二次大戦後、幾多の危機を経験してきた欧州諸国はその度に「結束力」を発揮して、ＥＵの統合を着実に進展させてきた。この歴史的事実に注目すれば、経済統合から政治統合を展望するＥＵの政治指導者の決意に頼みたくなる。冬が来て食物に事欠くギリギリスを見捨てたアリの行為は『イソップ物語』の結論であるが、欧州諸国にこの寓話が伝わる過程で、キリギリスを救済する方向に寓話が改変されていった。この改変は、「備えをしていなかった者［キリギリス］が生き残るために、備えをしていた者［アリ］を襲って蓄えを奪うようになれば、集団が崩壊してしまう」との指摘（堺屋太一『日本とは何か』１９９４年）とは好対照を成している。■